

## ■教育講演

津軽と原風景  
——太宰とイタコ——

佐藤時治郎\*

**要旨：**津軽平野の孤峰，岩木山は信仰の対象であり，ゴミソと呼ばれる霊能者たちが住んでいる。盲人女性のイタコが死者の魂を現世に呼び戻して語らせるのに対し，ゴミソは自分に憑依している神をこの世に降ろし憑き物を追い払い，病気を治す民間医療も担当する。生命の感動を唄う津軽三味線とともに民間信仰に担い手として津軽の現風景を彩る存在である。沖縄のユタ，カンカカリアに共通する信仰の棲み分けが今も津軽の文化・生活に色濃い影を落としている。没後50年になる津軽を代表する作家，太宰治はイタコの語り＝騙りの構造を生涯持ち続けた。神経心理学が器質的喪失体験者を研究するのに対し，太宰の文学は心理的喪失体験者の魂を癒す営みといえる。 **神経心理学 15 ; 20-26, 1999**

**Key word :** イタコ, ゴミソ, ユタ, カンカカリア, 太宰治  
Itako, Gomiso, Yuta, Kankakaria, Osamu Dazai

約30年ぶりで思い出の赤倉の地を踏んだ。藩祖津軽為信が津軽統一を果たす前の岩木山登山口に当たり，1,500年の歴史をもつ大石神社のご神体は巨大な溶岩である。冥府への入り口を閉じる「大石」として，巨石信仰の名残りと思われる。岩木山の5合目にある大石神社から上の山腹は神の土地，「神域」である。そこに東北地方では「アズサ」「アサヒ」「ミコ」と呼ばれている「カミサマ」，ここ津軽では「ゴミソ」という，カミが憑依して神託を語る人々が集落をなして集まるようになったのは，敗戦後の庶民が日々の暮らしに不安を抱き，自分の将来や病気を案じた時期に当たる。この地に修行のために初めて「籠もり堂」を建てたのは大浦村鼻和部落出身のゴミソ，工藤むらで大正5年のことである。最盛期には28カ所の修行堂が建てられたが，今は5人のゴミソが堂を維持しているにすぎない。代替わりして堂宇が大きくなった所もある。周囲の自然も，30年前の荒

涼とした風景とは違って樹木が生い茂り，いかにもゴミソの隠れ住む地という印象であった。ゴミソの修行堂の多くは赤倉の沢にそって建てられており，龍神あるいは水神信仰が主体である。ゴミソは信者の求めに応じて自分に憑依しているカミを呼び出し，信者の将来や病気について神託を受ける。心因性の精神障害はムジナやエズナ憑きとしてカミの威光で憑き物を落とし，心身症であれば暗示効果で心理療法的に対応し，身体病であれば昔ながらのヒルあるいは「吸い玉」による瀉血療法を行う。物資や薬の乏しい戦後に多かった結核患者には蝸牛を薬としてそのまま食べさせたという。

その「治療構造」は多くのゴミソの体験に根ざした巧妙なもので，それに個人的な工夫を加えており，最初に接触した中年の女性ゴミソの数奇な運命と彼女に憑依したカミとの特異な関係は日本各地ののカミサマや沖縄のカンカカリア，韓国のムーダン，旧満州や蒙古のシャーマ

1998年10月16日受理

Tsugaru's Original Perspective — The Itako and Osamu Dazai —

\* 弘前大学名誉教授，弘前愛成会病院・弘前神経科学研究所，Tokijiro Sato : Hirosaki Aiseikai Hospital - Hirosaki Research Institute for Neurosciences

(別刷請求先：〒036-8151 青森県弘前市北園1-6-2 弘前愛成会病院・弘前神経科学研究所 佐藤時治郎)

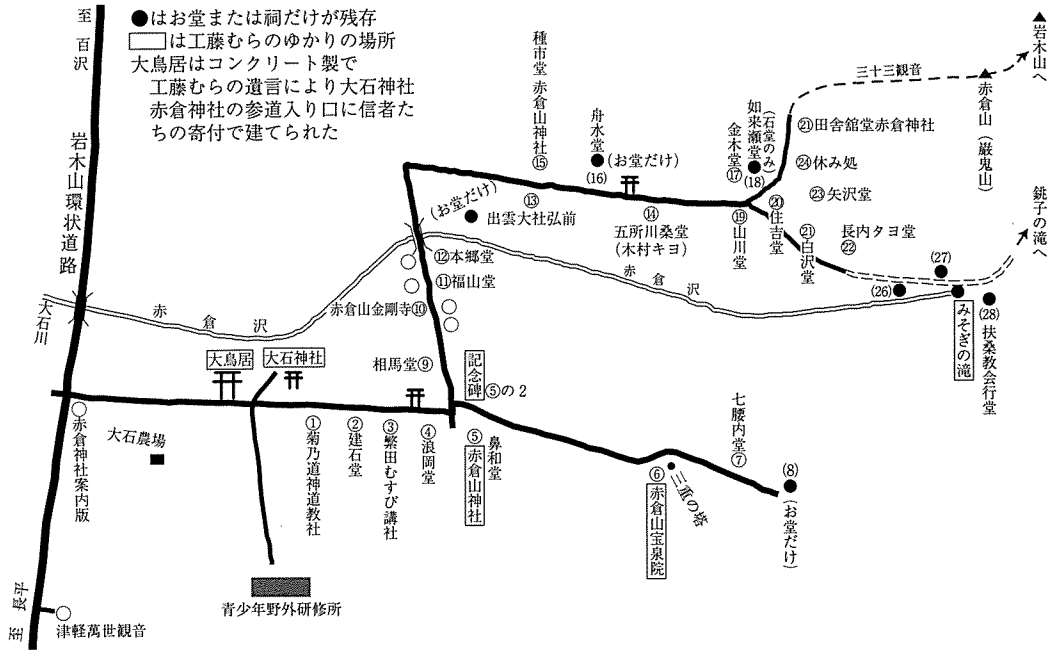


図 赤倉霊場案内略図 (昭和 55 年 8 月)

ン系の祈祷師について書かれた記録と似ていたが、カミにとり憑かれ、ゴミソとならなければなかった自分の運命を諦め、悩みを抱えて来る信者のために役立つことで自分の「業」を少しでも和らげようと辛い修行に耐えていると話してくれた。津軽には「ゴミソの末路は哀れなり」という言い伝えがある。ゴミソは元来、霊能者の素質を持ち、人生の悩みや病苦を引き金にして森田の言う「祈祷性精神病」の状態となり、それを契機に憑依現象を自由にコントロールできるようになった人々のことである。

イタコと言う名は国際的にも有名で、津軽のゴミソとイタコを同一視する人が多いが、イタコは盲人の女性になるもので、農家の働き手としては役に立たず、イタコになるほか生活の道はなかったのである。イタコの修行は辛く厳しいもので、盲目の身で水汲み、家事の重労働の上、祭文その他のイタコ生活に必要な知識の修得のための努力、声の善し悪し、語り的高手・下手、演技能力や憑依能力も要求された。イタコの「成巫」の儀式は修験道の修行に似て、長期の穀絶ち、塩絶ちと3日間続く「感覚遮断」状況下での精神的・肉体的疲労の頂点で「せん

妄状態」となり、カミの声を聞き、姿を見るのである。その時に現れたカミが、そのイタコの守り神となる。イタコはそのカミが選んだ花嫁として婚姻の式を挙げ、師匠の「許し」が出て晴れて一人前のイタコとなる。本人の苦労も大変であるが、家族の経済的支援も大変であった。

明治政府は津軽の祭りである「ねぶた」を蛮風として廃止させたが、人心を惑わすものとしてイタコも弾圧した。津軽では盲人女性の救済手段として幕末まで公認されていたイタコ達は以来、官憲を恐れ、自らの身分、職能を隠すようになった。30年前、つてを介してやっと会えた年老いたイタコも「今はイタコはしていない」の一点張りで実際に「死者降ろし」をやってみせてくれなかった。イタコは客の求めに応じて「死者」、それも最近死んだ死者をこの世に降ろし語らせるのが本来の役目である。そこがゴミソの役割と違い、互いに住みわけることができたのである。

昔、聞いたところではイタコの語る「死者の物語」には30幾通りのストーリーがあり、それを基本に客からの情報をからませ、本来の筋

書きを飾りたて、声の良さ節回しの巧みさで客の「喪の気分」を慰め、こころを癒すのである。「イタコの語り」は「死者の語り」であると同時に「客」を元気づける芸能でもある。「イタコの語り」が持つ「癒しの」の働きと「芸能」の二重の働きは、結果として客の心を「騙る」つまり、騙すことになる。長部日出男がイタコの「語り」は「騙り」だと言うのはそういう意味である。「喪中の客」のために死者に成り代わって語ることで客にカタルシス効果を十分に与えることができるイタコが「良いイタコ」と評判をとるのである。イタコとゴミソの区別は30年前はまだ、辛うじて各々の役割分担が守られていた。イタコは沖縄のユタにコをつけ、イタコとなったという説がある。一方、ゴミソは虚無僧（ゴムソウ）から由来したという説もあるが、いずれも定説ではない。今でも赤倉近くの部落では、ゴミソという言葉は死語ではないが、弘前市内ではカミサマが両者の通称である。ヨーロッパでも未だに黒魔術に由来する民間信仰は根強く生き残っていて、カルト集団に取り込まれたりしている。津軽のイタコは消滅しつつあるが、ゴミソは代替わりしつつも「津軽の原風景」の一つとして、しぶとく生き残る事であろう。

イタコと並んで盲人男性の生き方としてボサマ（坊サマがなまったもの）と呼ばれた門付け芸人が存在した。その生き残り、津軽三味線の高橋竹山も「津軽の原風景」にとり欠かせないイメージの証人である。竹山は津軽三味線の名人といわれ、平成10年2月、平内町小湊の自宅で喉頭癌のため87歳の生涯を終えた最後のボサマである。

3歳で視力を殆ど失い、15歳で津軽三味線を習いはじめ、17歳からで東北、北海道各地を門付けして歩いた。戦後、津軽民謡の大御所、成田雲竹の伴奏者として多くの民謡の作・編曲をする。昭和40年代になり、「渋谷ジャンジャン」に出演し一躍、有名人となる。竹山の有名な「語り」について、アナウンサーで司会者の伊那かっぺいは「竹山は三味線より語りの方がうまい」と評した。演奏の間をつなぐ「語り」

で自分の生い立ちや、門付けの苦勞、人生観を素朴でユーモアのある語り口で聴衆に語りかけた。乞食芸人という意味の「ボサマという汚い言葉で呼ばれた芸人が今では芸術家サマなどと呼ばれている」とジャンジャンでの語りで今昔の感を述べたが、「三味線は棹が鳴き、皮が鳴く、糸も鳴く、撥が鳴く」「糸（絹糸）も皮（犬の皮）も撥（たいまいの甲羅）も生きもの、棹も耳を澄ませばコーン、コーンと鳴いている」という竹山の芸談はそれ自体ドラマであり、人生訓である。門付け時代には柘植の撥が買えず、柘植の櫛や剃刀で代用した。そのため糸を切らない奏法として津軽三味線の伝統である「叩く」奏法でなく、「弾く」奏法を工夫した。中国琵琶や胡弓、ヴァイオリンやピアノまで「触った」と述べ、早朝の小鳥のさえずりを録音し、自分の師匠と称した。芸人の覚悟として倒れるまで舞台に執着した竹山の執念は死ぬ56日前の最後の演奏にも見られ、津軽人の「じょっぱり」の姿そのものである。

津軽人気質をあらわす言葉に「じょっぱり」「えふりこき」「あしふっぱり」という言葉がある。つまり強情をはり、よい格好をするが他人の出世を好まないという意味である。昔、宮城音弥は『日本の県民性』という本を出したが、他の東北各県が分裂気質者で占められているのとは違い、青森県それも津軽地方だけが分裂気質と躁うつ気質が混じりあって独特の県民性を示すと唱えた。その代表として選んだのが破滅型の私小説作家、葛西善蔵である。太宰治は郷土の先輩として、『善蔵を思う』という作品の中で自分の姿と重ね合わせているが、むしろ太宰こそ津軽気質の代表者と言うべきであろう。

太宰治の性格については島崎敏樹ら、懸田克躬、津川武一、河合博、大原健士郎、梶谷哲夫らの病跡学的研究と奥野健男、相馬正一、小野正文、杉森久英、長部日出男、小笠原功らの人物評がある。性格類型学的には「分裂病質」を主体に、抑うつ、自己不確実、顕示性を併せ持つ、複雑な「精神病質者」であるとされ、諸家の間にほぼ異論はないようであるが、太宰の複雑に見える気質は津軽人気質を拡大・誇張し

たものともいえる。ただ、その特異な生育環境と時代状況、郷里における生家が置かれた位置など、環境的な条件が複雑に絡み合い、彼の生来の過敏性、人間的弱さにより増幅されて性格・行動の異常性が目立つようになったといえる。太宰については夏目漱石に比肩するほどの多くの評論があるが、マルクス主義の立場とキリスト者の立場からの意見は批判と身びいきの声音が強く、太宰ファンの文章は惚れた者の心酔の言葉に満ちている。太宰が、いま、若くて精神科外来を訪れたら、アダルト・チャイルドの太宰は境界例と診断されるのではないだろうか？

今年は奇しくも太宰の没後50年になる。美知子夫人が長年、大切に保存していた『人間失格』の原稿、メモ、夫人宛の遺書を遺族が公表するなど、第二次太宰ブームを盛り上げる資料の出現で、「死んだ太宰だけがなぜ、もてる」というやっかみの声が出るほど、「ユリイカ」「スバル」「新潮」など、マスコミがこぞって太宰特集を組み、書店には「太宰コーナ」が設けられるなど、にわかに、太宰文学の再評価が声高に語られるようになった。

ここでは、こうした中期の作品群の中で、これまで、あまり話題にされなかった注目すべき作品として『盲人独笑』を取り上げてみる。

昭和14年5月2日づけの伊馬鶉平宛の葉書で「葛原勾当日記」を貸してほしいと依頼している。太宰は過敏な人間に特有な、「音」に対する鋭敏な感覚の持ち主であった。「音に就いて」というエッセーの中で小説における音の効果を述べ、聖書と源氏物語には音の描写はないと締めくくっている。太宰は他人の日記を基に『女生徒』『正義と微笑』『パンドラの匣』『斜陽』などの傑作を生みだしている。太宰はイタコやゴミソのように他人の文章に容易に憑依する奇異な才能を持っていたが、「葛原勾当日記」の存在を知り、たちまちその能力を発揮、それまで誰も思いつかなかった奇手とも言うべき「手」を編み出したのである。葛原勾当の子孫、葛原幽氏から手紙で勾当日記の文章改作について「えちごじし、九十へんとは、それあ聞こえま

せぬ太宰くん」と叱られ、「文盲不才、いさぎよく罪に服そうと存じます。他日、創作集の中に編入する時には“四きのながめ。琴にて。三十二へん”と訂正いたします」とエッセー『文盲自嘲』の中でひどく恐縮している。

しかし、太宰は万事、承知の上でやったことで本音は違う、確信犯のはずという意見がある。太宰研究家の相馬正一も「おそらく友人、知己といえども、太宰の仮面の下の素顔を覗き見た者は一人もいないのではないか」と述べているように韜晦の名手で、本当か嘘かわからないところがあつたと美知子夫人も回想している。虚実皮膜の関係を作品とした太宰ではあるが、葛原氏への陳謝の気持ちに嘘はなかったであろう。太宰には妙に律儀なところがあつた。師と仰いだ井伏鱒二の前では膝をくずしたことがなかったという。幼児期に叔母きえに礼儀について厳しく躰けられたためである。昭和22年、死の前年に書いた『わが半生を語る』というエッセーの中で「私は変人にはあらず」と題して、「私は自分を変人とも、変わった男だとも思ったことはなく、きわめて当たり前の、また古い道徳などにも非常にこだわる質の男です。けれども私は弱い性格なのでその弱さといふものだけは認めなければならないと思っています」と素直な調子で書いている。ところが、翌23年には『如是我聞』で激しい怒りをサロンの偽善、炉辺の幸福にぶつけ、このため井伏鱒二とも気まづくなったが、これにより志賀直哉に代表される戦前の私小説は権威を失墜したと奥野健男は評している。

さて、作品の概要であるが、原稿用紙30枚ほどの短編小説で、「はしかき」「葛原勾当日記本文」「あとかき」の3つの部分からなっている。「はしかき」で簡潔に幕末の備前、備中、備後の三備地方で60年間、箏曲家として活動した本名矢田柳三、勾当の位階と葛原の姓を与えられるも栄位を望まざり、座頭の位階を返上、検校の地位を固辞する。竹琴の発明、オランダ時計の修理、自身の入れ歯の制作、自宅の設計などの才能があり、折り紙細工の名手でもあつた。16歳から稽古日記を代筆させていたが、

26歳の時、平仮名、数字、5文字の常用漢字、変体仮名、句読点など百字に足りない木版活字を作らせ、箱に順序正しく納め、常時携帯、手探りで印刷すること40年、ヘレン・ケラーをして日本のタイプライター発明者と感動させた。自らは読むことが不能であった、葛原勾当の40年間の「全日記の内容を、26歳、一年間の日記にかぎって紹介する。勾当の人となりや自分の感想、批評もその中にとけ込ませてある」と太宰は述べて、次ぎに不思議に哀調のある仮名文字の本文を紹介する。主人公の盲人ゆえの肉体的・精神的かなしさ、いらだちを肉感的に浮き上がらせている。ところが、「あとかき」で実は日記は原文そのままではなく、自分が大胆に改作した、と突然告白する。「作家としての、悪い宿業が、多少でも、美しいものを見せられた時。それをそのまま拱手鑑賞していることが出来ず、つい腕を伸ばして、べたべたと野蛮の油手（ここで言う「手」とはジャズのアドリブに当たる津軽三味線の即興的な変奏演奏の「手」のことである）をしるしてしまうのである。作家としての、因果な愛情の表現として、ゆるしてもらいたい。美しければこそ、手も、つけたくなったのだ。ただならぬ共感を覚えたから、こそ細工をほどこしてみたくなったのだ。そこに記されてある、日々の思いは、他ならぬ私の姿だ。「こまつやのおかよ」との秘めたる交情も、不逞の私の、虚構である。それは、私に於いては、ゆるがぬ真実であっても、原本に於いては、必ずしも事実ではない。作家のひとりよがりの、早合点にすぎぬだろう。けれども、私は、意識して故勾当をおとしめようとした覚えは無い。常に故人の、「一流芸者」としての精神を、尊重して来たつもりである」と述べるのである。

太宰は自分の心に共鳴する文章に出会うと、たちまちその文章の主の心に憑依して、自分の思いを投影してしまう。『盲人独笑』もまた、その一例である。長部日出男は太宰文学の魅力として、まず、「題」つけ方がうまい。つぎに「書き出し」の仕掛けがうまい。太宰本人も代表的な実験小説『女の決闘』の書き出しで、文

豪諸家の書き出しの実例をあげている。最後に、「おわり方」がうまい、3拍子そろっている、としている。太宰は生前に「オチつき作家」と言われ、坂口安吾は「太宰の作品は後世に落語として残るだろう」と言っている。『盲人独笑』は太宰のこうした新しい文学創造のための実験であったが、同時に「あとかき」にある太宰文学創造の秘密の吐露は貴重な証言といえる。

常に己をキリストに擬し、弱者の永遠の味方たらんとした太宰の生き方の背景には、津軽の風物、とくに幼児の頃、叔母の連れの肩車から見下ろした嘉瀬の「藤の滝」の光景は、名作『魚服記』の舞台となった滝壺の描写に生かされているが、「滝」は太宰にとり重要な津軽の「原風景」であった。また、川倉地蔵境内のイタコの語り、そこで聴いたであろう津軽三味線の創始者「神原の仁太坊」こと、秋元仁太郎の「叩き三味線」のリズムも太宰の深層意識に潜み、太宰特有の文章の音律・韻律となって蘇ったと思われる。「盲人独笑」の仮名書きの抑制された哀しい調べも太宰の心の琴線を震わせ、棄て去った故郷を想い、盲人という身体障害者の葛原勾当の想いに憑依したのである。まさに、太宰はイタコ、ボサマの末裔であるといえる。

故郷を忘れようと念ずるがゆえに、それまで津軽で幼児期に体験した原風景にあえて眼をそむけていたのが、戦争末期に「津軽」を書くために青森の地を訪れ、20年ぶりで、津軽の未知の各地を取材のために歩き廻った。その結果、抑圧されていた望郷の想いが一度に花開き、傑作、『津軽』が誕生したのである。

イタコ、ゴミソより津軽三味線へ、高橋竹山より太宰治へと「津軽の原風景」のテーマを落語の「三題噺」よろしく述べてきたが、25年も津軽三味線のルーツを追い求めた大條和雄（懇親会で津軽三味線を演奏した）は津軽人気質を、見栄を張る「エフリコキ」は津軽の人々の陽性、進歩性をあらわし、チャレンジ精神を示すものであり、強情を張る「ジョッパリ」は反対に陰性、保守性を意味し、高橋竹山の孤高の精神、太宰の芸術至上主義に通じる。汝、何者ゾという意味の「ナ・ナンダバ」は反骨、権

威に屈しない津軽人の気骨を表すものだ」と解説している。津軽は作家や芸能者が輩出する一方、政治家が育たない土地柄で隣の岩手県と好対照をなしている。南部の人間は津軽で生き残るが、津軽の男は南部で暮らせない、津軽を思い、ノスタルジーに駆られるからと言われている。太宰治もまた同じであった。都会（東京）に憧れた太宰はデラシネ（浮き草）となって都会生活に根を降ろせず敗退した。

生家に対する愛と憎しみの相剋に悩んだ太宰はマルクスの「言葉」の洗礼を経て、キリストの言葉とされる新訳聖書の「聖句」に救いを求めたが自身の魂の救済は果たせなかったといえる。太宰は自分の作品が仲間から手ひどく批判

された時に「10年後に評価されれば良い」「20年かかるかもしれない」と言ったという。後世に自分の文学評価を託した太宰の祈りだけは没我50年にして果たされることになった。

神経心理学の主たる研究対象が失語症、失認症、失行症といった「器質的な喪失体験者」であるとする、太宰治は、イタコの魂を持ち、さまざまな「心理的な喪失体験」に悩む現代の若者のこころを癒す、不思議な力に満ちたプラーキット（口承文芸）的なロマン文学の創造という「玄妙・奇異な術」を心得た、津軽の民間伝承である「嘘の五郎」に似た人生を送った希有の前衛作家であったと考えられる。

### Tsugaru's original perspective

— The Itako and Osamu Dazai —

Tokijiro Sato\*

\*Hirosaki Aiseikai Hospital-Hirosaki Research Institute for Neurosciences

In what was then called Tsugaru, written with the characters meaning 'east', 'Sun', and 'flow', now called the Tsugaru Plain, there is a lone peak called Mount Iwaki. This mountain is the object of powerful belief for the common people. On the mountain side, there is a place called Akakura where the so-called kamisama, those with spirit ability, live. People from outside Aomori Prefecture are most likely familiar with the word itako, however, few would know of the word gomiso for the kamisama by the people of the Tsugaru district. I was one of those people when I first came to Hirosaki from Sendai 30 years ago. Through the psychiatric outpatients I treated, I learned that it was common for patients and families to visit a kamisama for treatment before coming to a hospital. I learned the through training, the blind female itako learned a manner of 'speaking', through which they would call back deceased souls. This differs from the gomiso, who by virtue of their own possession, would call the gods down to this world, and through this energy of possession, would un-

dertake the medical treatment of patients by expelling the possessing spirit. Such a difference existed long ago, and now, as the itako themselves have been getting older, so have their numbers dwindled. On the other hand, the practice of the gomiso continues on even today. So it is that despite vague differences which exist between the itako and gomiso, and while in some places the name gomiso lives on, it has become custom for ordinary people to refer to these healers as kamisama. With the bearers of these common beliefs the colorful and unique Tsugaru Perspective lives on, and in that, as in the commonalities of the function belief between Tsugaru and the yuta and kankakaria of faraway Okinawa, point toward the dark nature of Tsugaru culture and lifestyle.

This year is the fiftieth anniversary of the death of Tsugaru's representative author, Dazai Osamu. Tsugaru has been home to many writers, Kasai Zenzo, Ishizaka Yojiro, Kon Toko and his brother Hidemi, Sato Koroku, and his son Hachiro and daughter Aiko, Kon Kanichi, Osabe Hideo just

to name a few of the many. However, it was Dazai who took the most influence from the itako. Dazai's uniquely intimate writing style and his success in using the itako speaking style was noted by Osabe. The point of departure for Dazai's literature was "remembering", after which his works read with a consistency like the low sound of music, a consistency similar to the deceiving manner of the itako's

rhythmical speaking.

If the subjects of Neuropsychology research is to analyze subjects who have experienced organic loss (of brain function), the mysterious attraction of Dazai is that it was written by one who feels an eternal suffering, and in that sense, as a literature which analyzes the heart, it can for a time, heal those with psychological loss.

(Japanese Journal of Neuropsychology 15 ; 20-26, 1999)